

第15回

繁殖のお話し(その15 哺育のお話 1)

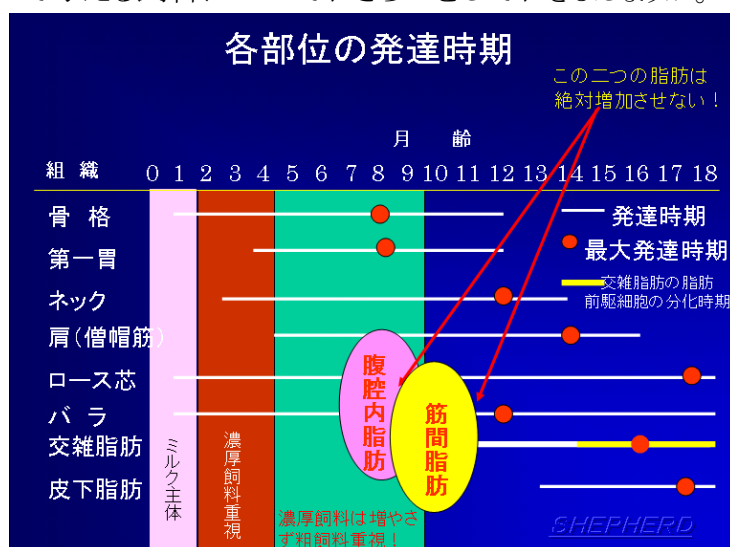
(有)シェパード 獣医師 松本大策

こんにちは、ここのところ少し忙しすぎて体調を壊してしまいました。みなさんはいかがですか？農繁期と季節の変わり目が重なりますから、体調にも異常が出やすい時期です。十分お体はいたわりながらお仕事をなさってください。

今年はラニーニャ現象で、カラ梅雨の予報が出ていますが、こういう年は梅雨に振らなかったと思ったら、梅雨明けにいきなり集中豪雨が来る、なんて事が多いですから注意しておきましょうね。特に、最近では台風の進路がきた向きに変わっていますから、台風の進路に当たる方は、前もって屋根の浮いたところや、トタンの剥がれ掛けたところは修理しておきましょう。

繁殖のお話し 15

さて前回までで、子牛が産まれた時点で実施すべき衛生対策のお話を一応終わりました。いよいよ子牛の飼養管理に入っていきます。まず、子牛の成長の仕方と、そこで与える飼料についておさらいをしておきましょうか。



図にもありますように、離乳時期は飼養管理によってまちまちですが、生まれて2ヶ月から4ヶ月はミルク(自然哺育であれば母乳です)が主な栄養源です。

自然哺育の場合は母牛の管理が重要になります。母牛の飼養管理がよいと、子育てはお母さん牛に任せておいて大丈夫ですが、母牛の飼養管理が悪いと、

母乳の質が悪くなって子牛の発育が悪くなったり、いわゆる「母乳性白痢」の原因にもなったりするのです。

母乳が原因で起こる下痢の原因は大まかに4つに分けて考えることができます。一つ目は、母牛の「泌乳のための増し飼い」が不足するために母牛が痩せるケースです。この場合、母牛は不足するカロリーをまかなうために体脂肪を動員します。簡単に言う



と、「脂肪を燃やしてカロリーに変える」のです。しかしこのときには、ビタミンB1とブドウ糖が必要なのです。この二つが不足すると(増し飼いが足りない場合は、この二つも不足しがちです)、脂肪の不完全燃焼が起こります。脂肪は完全燃焼すれば、エネルギーと炭酸ガスと水になりますが、もしも不完全燃焼すると燃えかすとしてケトン体というシンナーのようなものが発生します。ケトン体は脂溶性ですから子牛が飲むミルクの中に混入します。シンナー入りのミルクを飲ませるわけですから下痢ぐらいしてもおかしくはありませんよね？

二つ目のケースは、大豆粕のような分解性タンパク質を与えすぎた場合です。この場合、アンモニアの生成が増えて血液中から、これまたミルクの中に混入します、いわば子牛にシヨンベン入りのミルクを飲ませてるようなものです。これまた下痢してもおかしくありませんよね。

3つ目のケースは、母牛の餌が多すぎる場合。この場合、ミルクが出過ぎて子牛が飲みきれず、母牛の乳房の中(詳しくは乳首の乳管洞という部分)に飲みのこしたミルクがたまって腐ってしまうのです。子牛は次にお腹がすいたときに、この腐ったミルクを飲むので下痢をするわけです。

最後の1つは、母牛の後産が残ったりして子宮内膜炎を起こしている場合。子宮内のバイ菌はミルクにも移行しやすく、このバイ菌によって子牛が下痢をするのです。母牛の後産が引っかかったり、汚露の排出が遅れたりするのは、母牛のビタミンDやカルシウムが不足しているケースが多いので注意してください。僕は、分娩前1ヶ月から2週間前程度にビタミンDを300万～500万単位給与することをお勧めしています。ゼノアックのドンハヶ岳ADEでしたら1頭あたり日量50gを1ヶ月間給与すると300万単位のビタミンDと150万単位のビタミンA、そして子宮回復に有効な亜鉛やカルシウムを補うことが出来ます。

